



伊万里市立 伊万里小学校 校歌

片岡繁男 作詞
平岡均之 作曲

明るく ♩=104

ひーか かりかがやくやまーかわにと
おといさちーのあふるるいまり
かおるれきしをうけついで ただししみちを
すすみましようわれらはいまりのよいーこと
いまり いまり いまり いまりしやうがっこう

一、ひかりかがやく 山川に

とおとい幸さいわいの あふるる伊万里
かおる歴史を うけついで

正しい道を すすみましよう

われらは 伊万里のよい子ども

伊万里 伊万里 小学校

二、やさしい先生 よい子ども

なかよく学ぶ たのしい学校

ともに元気に たゆみなく

のぞみゆたかに はげましよう

われらは 伊万里のよい子ども

伊万里 伊万里 小学校

三、若草もゆる 城山じょうやまに

あかるい声が こだまをかえす

はずむところに むつみあい

つよいからだに きたえましよう

われらは 伊万里のよい子ども

伊万里 伊万里 小学校

片岡 繁男(かたおか しげお/作家・詩人)

1915年5月13日佐賀県伊万里市幸善町生まれ
九州大医学部専攻科修、医博、「白磁」主宰、「聖ジュワンの水」、詩集
「川の子・太郎の歌」、日本文芸家協会会員、
東京伊万里会会長 東京都中野区
2010年4月22日ご逝去。享年94歳。



作詞にあたって

私は校歌作詞に当って第1に、如何なる政治体制になろうとも変革の必要がないよう留意する。日本の敗戦で旧来の校歌は不適切になったのだ。

伊小校校歌について記そう。それは私が伊小校5年の新学期であった。新しい担任のT先生が「道に『道路』の他にもう1つ考え方がある。知っている者はいないか。」と問うた。私は少し知っていると思ったが躊躇した。T先生が「誰か何か言えそうな者は？」と尋ね、ぐるりと見回した。私が、1人挙手した。が私は「私たちが毎日踏んでゆく道です」と未熟な応答しかできなかった。するとT先生が「きみは『人間が踏み行うてゆくべき道』と言いたかったの难道う？」と助け船を出してくれた。私がとびつく思いで「そ、そうです」と相槌をうった時「何だ。ほんとは知らないくせにハハハ」と失笑が起こった。が私はそれどころではなかった。「先生って、すばらしいなあ。私はその『踏み行うべき』がどうしても出てこなかった。その言葉が私の口から出るようになるのにどのくらいの歳月がかかるだろうか」とその事で頭がいっぱいだった。成人して〈悟ることは寧ろ易しい。だがそれを全くその通りに語ることは甚だ難しい〉との先覚の訓(おし)えを知得したとき、伊小校5年生のその時をしみじみ憶(おも)ったことだ。以来、『正しい道をすすむ』ということは今日に至っても、いや私の生涯かけての課題である。

校歌はまさしく校是だ。まして小学校校歌は我々が生まれて初めて教わる『学びの歌』である。小学校在学6年間だけの校歌ではない。私は母校・伊小校校歌の中核に、私が5年生の新学期に感銘を受けた〈道〉を据えた。

また、『こだま』が木の魂(木霊)だということ、森の声であるということとそのころ教わった。『同じように川には水霊(みずたま)が、そして水の生命が在るのだ』と、伊万里川の幸橋の袂に佇って権現社の森を、城山を眺めやったことだ。『山川に溢るる尊い幸』や『かおる歴史』についても〈道〉と同じように、平成の伊小校の児童たちは(大正年間の私が教わった場より更に)深々と、そして児童の背丈に跼(かが)めての指導を得ているであろう。『むつみあう』という美しい言葉を、他校の児童は知らなくても伊小校児童は「校歌で教わった」と胸を張るのだ、という私の憶(おも)いがそのときあったことも書き添えておこう。

これらの私の心象は現在(いま)、書きつづけている長篇小説『わたしはいつでも此処に帰ってくる』の登場人物に語らせている。

(2000・6・9 東京竹酔亭にて)